

研究課題

日本の伝統文化を核にしたアイデンティティの
確立を目指す能学習の構造化と指導法の探究

副題

～福山市と岡山市を結ぶネットワークシステムを中心とするICT機器
に支えられた学習能「鞍馬天狗」(第6学年)の実践を通して～

学校名

岡山市立三勲小学校 岡山三勲ICT活用研究会

所在地

〒703-8291
岡山県岡山市中区徳吉町一丁目1-21

学級数

21

児童・生徒数

525名

職員数/会員数

49名

学校長

池上 和則

研究代表者

杉元 順一郎

ホームページ
アドレス<http://www.city-okayama.ed.jp/~sankuns/>

1. はじめに

本校は岡山市の中心部に位置し、学区の周りには岡山城や後樂園などの歴史的な建造物等がある。この環境を生かして、1・2年生の生活科単元や3年生以上の総合的な学習の時間の単元で、ふるさと岡山や三勲学区の“人・自然・文化”を題材とし、地域との直接のふれあいを大切にする学習「ふるさと学習」に継続して取り組んでいる。「ふるさと学習」を通して、自ら課題を見つけ、追求し、解決していこうとする子どもや、ふるさとを誇りに思い愛する心をもった子ども、自分の成長やよさを自覚し自分の生き方について考えることができる子どもを育成したいと考えている。

この「ふるさと学習」の集大成として第6学年では「能学習」に取り組んでいる。「能学習」を通じて、日本の伝統文化のすばらしさを実感したり、伝統文化を継承していく能楽師の生き方を学んだりするとともに、温かく見守り、支えてくださる地域の人々の思いに気づくことができるようにしたいと考える。

第6学年では、これまで10年間に渡って能学習に取り組み、福山市在住の喜多流シテ方能楽師を年間20時間の特別非常勤講師として依頼し、計48時間の年間計画を立案し、実施している。能学習の集大成として、毎年11月には学区に隣接する岡山後樂園の能舞台を会場として発表会を開催しており、地域や保護者の方が多数参観している。この学習を通して、自ら課題を見つけ解決していこうとする意思・意欲と、自分の成長やよさを自覚し、特に伝統文化との関わりを通して自分の生き方について考えることのできる人間力の向上とを目指している。

2. 研究の目的

「能学習」を進める上で、能楽の講師による直接指導が年間20時間という時間的制約を受けていることや、居住地が福山市という遠隔地であり場所的制約を受けていることから、児童の問題意識の高まりに対して即応することが困難という問題点があった。また、新学習指導要領の実施に伴う教科授業時数の増加により、総合的な学習の時間を用いた能学習年間指導計画の見直しと指導法の改善とを図る必要を感じていた。そこで、福山市という遠隔地にある能楽堂の講師と岡山市の三勲小学校にいる児童との間に、映像と音声を用いたコミュニケーションを即時に図ることのできるネットワークシステムを中心としたICT環境を整備するとともに、今後10年間の見通しを持った能学習の年間指導計画やICT機器の活用による指導法の改善を図ることで、日本の伝統文化である「能」に根ざした日本人としてのアイデンティティの確立を図り、より一層人間力の向上を図ることのできる本校独自の能学習のあり方を喫緊に改善する必要があると考え、本研究に取り組んだ。

3. 研究の方法・内容

1 音声と映像を用いた福山岡山間を結ぶネットワークシステムの構築

遠隔地在住講師と児童を結ぶネットワークシステムの機材・ソフトを選定し、講師宅及び多目的教室へ設置し、授業の実施できるネットワーク環境を整備する。講師と相談し、WEBカメラを設置してもらった。ソフトは無料でテレビ会

議ができるスカイプを使用した。

2 能学習を支えるICT環境と多目的教室の整備

本校へ導入済みの40台のノートパソコンを活用できる多目的教室を新規に整備した。普通教室よりも広い教室を使用し、WEBカメラや電子黒板、プロジェクタ、デジタルビデオカメラ、教材提示装置などのICT機器を設置した。また、多目的教室と同様に体育館でもICT機器を活用して、能学習の授業が行えるよう環境の整備を進めた。

3 ネットワークシステム活用による能学習年間指導計画の改訂

遠隔地在住の講師と児童による、映像と音声を用いたコミュニケーション活動を授業の中に取り入れ、これまでの年間指導計画を改訂した。単元全体を「つかむ→探る→深める→広める」と構成し、それぞれの段階でICT機器を効果的に活用できるような学習内容を計画した。それに伴い、1年から6年までの「ふるさと学習」全体の年間指導計画も改訂した。

4 第6学年児童を対象とした学習能「鞍馬天狗」の実践

改訂した能学習年間指導計画に基づく研究授業を実践した。昨年度までとは異なる指導法を工夫し改善を図った。非常勤講師による直接授業20時間のほかに、ICT機器を用いた能の調べ学習や能以外の室町文化を体験する学習も実施した。また、本校4・5年生を対象に「能学習校内発表会」（平成22年11月2日）と、岡山後楽園の能舞台を会場とした「能学習発表会」（平成22年11月9日）を開催した。さらに、今年度は平成22年度国民文化祭岡山の協賛事業としても登録している。

5 研究の評価とまとめ

質問紙法や教師観察法等による調査結果をもとに、本研究を評価することにした。

4. 研究の経過

紙面の都合から、ここでは、年間の取り組みを「つかむ」「さぐる」「深める」「広める」の4つのステップで示すことにする。

○「つかむ」

過去の能学習校内発表会を想起し、ビデオを視聴することで学習の大まかな見通しをもつ。そして、社会科で学習した室町文化に焦点を絞り、「歴史と私たちのつながり～伝統文化をさぐる～」という学習に取り組むことを確認した。

○「さぐる」

本校には平成17年度の「岡山市教育の情報化」に伴い、40台のノートパソコンが導入されている。一人一台のノートパソコンや図書資料を用い、能について知りたいことを調べた。調べる内容を一人一つに絞り焦点化した。そして、調べた内

容をキューブのプレゼンテーションにまとめクラスで発表した。

5月下旬に、初めての能学習を行い、講師と出会った。講師から、能の歴史や本年度の演目「鞍馬天狗」の説明を受けた。また、実際に使用する楽器や能面を体験させていただいた。活動はDVCで撮影し学級で振り返った。



写真1・2 能面や太鼓の体験

隔週で講師に来校してもらい、能の所作や発声の仕方、舞の指導を受ける。毎回講師からは宿題が出され、そこで生まれた疑問について、テレビ会議を用いて問題解決学習を行った。

第1・2回研究授業での児童の質問や要望

- ・扇の動かし方や角度について
- ・歩き方（すり足）が正しく行えているか
- ・ひびきのある声の出し方について
- ・構えの姿勢や正座を長い時間すること
- ・能の歴史について不明な点 など



写真3 テレビ会議で質問する児童の様子

通信環境が時々悪く、会話が聞こえない時があったが、児童の謡や所作をWEBカメラを通して確認していただき、気づいたことを指導していただいた。また、カメラで写る範囲が限られており、全体での指導は困難であった。

夏休みに児童一人一人に鞍馬天狗の謡を録音したCD、舞を録画したDVDを配布し、謡や舞を覚えることができるようにした。

○「深める」

2学期に入ると、シテ・子方・地謡という役割を決め、それぞれのパートで能について深めていく学習を進めた。それぞれのパートの一つ一つの動きや声は、一斉学習の時以上に細かい指導を受ける。そこで、違うパートの人が指導を受けている間の空いた時間を使って、グループ内で児童自身が互いにアドバイスをし合い、学習をするようにした。その際、わからないところを講師の舞を録画したビデオを見て確認したり、お互いにビデオ撮影をして動きの完成度を高めた。

児童は朝学習や休み時間にも練習を行う。その際は、DVCよりも簡易的に使用できる教材提示装置で、自分たちの動きを確認した。最初は機器の使い方がわからなかったり、効果的に使用できていない場面もあったが、徐々に自分たちでICT機器を円滑に準備し、効果的な学習をする姿を進めることができた。



写真4 講師の舞をDVCで確認している



写真5 お互いにDVCで撮影している



写真6 教室での学習

第3回研究授業での児童の質問や講師の指導

- ・謡のリズムが変わったところの確認
- ・舞の細かい動きについて
- ・目線や構えなどの所作についての指導



写真7 スカイプで舞の指導を受ける様子

直接指導の間にテレビ会議で授業を行うことで、児童の意識が継続し、高い意欲をもって最後まで取り組むことができた。パートごとの練習になると、カメラが一台だと入れ替わりの時間がかかるため、複数台を切り替えて行うことが必要であった。

○「広める」

約半年間の学習を経て、平成22年11月2日に能学習校内発表会、9日には、隣接する後樂園において、「はじめての能楽発表会」を行った。校内発表会では下級生に能のすばらしさを伝え、伝統文化を受け継いでいく素地を養うことができた。また、後樂園の発表会には多数の保護者の協力・参観があった。また、地域の方々・一般の参加者が観覧に訪れた。



写真8 校内発表会の様子



写真9 後樂園での発表会の様子

5. 研究の成果と今後の課題

伝統芸能の学習では、口伝で指導することが基本である。昨年度までは、講師が来校した際の直接指導でしか学習が進まなかった。ICT機器を使用することで、指導の回数が増加したことは、指導の深まりについても、意識のつながりにおいても成果があった。児童のアンケートの結果では、「テレビ会議での授業で学習が深まりましたか」という質問に対し、94%の児童が「深まった」と回答した。また、ICT機器を活用し自分の学習を振り返ることにしても91%の児童が「効果的であった」と回答した。

今後の課題としては、講師との時間の調整が難しく、なかなかテレビ会議による授業が行いにくという点があった。弾力的な運用のできるテレビ会議システムへと改善を図りたい。

6. おわりに

本年度の研究では、深めるの段階を充実して行うことができた。次年度以降も同様にICT機器を活用して取り組みたい。また、次年度は「広める」の段階で、児童のより主体的な活動を進めるためにオンラインポートフォリオを用いて、活動の様子を発信していくことを目指したいと考えている。

参考文献

教育の情報化に関する手引 平成21年3月 文部科学省